20210606 レムナント教会１部

キリストにとらわれ（Ⅱサムエル記 12:7-15）

私たちは神様の恵みによってせっかくクリスチャン、信者になりましたのに、ほとんどのクリスチャンが残念ながら信者らしく生きることがあまりできていません。それに対して「そんなもんだろう」と思わずに、悔しい、もったいないと思うのが当然だと思います。信者なのに信者らしく生きることができないことには様々な理由があります。その中で大きな理由の一つが何かと言いますと、罪に勝てないということです。罪をあまりにも軽く見て、軽く扱ってしまいます。そうすると、しょっちゅう罪と仲良くなり、未信者と同じ水準で生きることになります。信者らしい人生というのは期待できません。それから、罪があまりにも重すぎて、その罪に制せられ、罪にとらわれてアップアップすることにより身動きがなかなか取れない、ということで信者らしい人生に進むことができなくなる場合があります。今日、ダビデのミス、ダビデの過ちを通して、信者の私たちが信者らしく生きるためにどのように罪と取り合うべきなのかということを確認していきたいと思います。ダビデは、先週も確認しましたように神の御心にかなうといわれるイスラエルの最高の王、また、信仰者でした。それなのにダビデは二つの大きな過ち、二つの大きな悪を行うことになり、神様に非常に怒られることになりました。それを通して私たちはこれから信者らしく生きるためにこのようなメッセージを契約としてしっかり握らないといけません。

その第一が、
1. 福音の人でも油断するとサタンにいつでもやられてしまうのだということです。

救われたから、また、信仰に歩んでいるので大丈夫だろうということは油断になります。福音の人、信仰者でも油断するといつでもサタンにやられてしまうのだということを心に肝に銘じましょう。ダビデの信仰のすばらしい姿というのは先週確認しました。どんな条件であろうが条件に縛られない、どんな苦難がやってきてもその苦難に打ち勝って、また、どんなに成功を収めたとしても高慢にならない、そういう立派な信仰者でした。しかし、サタンはそのようなダビデの隙をいつも狙っていたわけです。むしろそのようなすばらしい立派な信仰者だからこそ隙をいつも狙っているかもしれません。その立派な信仰者がそのままずっと行きますと、サタンにとって大変なことになるので、どのようにしていつ倒すことができるか、たんたんとその隙を狙うのはサタンにとって当然でしょう。だから、パウロもこういうことを言っています。Ⅰコリント 10：12、「ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい」。うまくいったとき、信仰的に神様に認められる大いなる祝福に預かるようになったときこそ気をつけないといけないと言われています。エペソ 4：27 にも「悪魔に機会を与えないようにしなさい」と言われていることを忘れないようにしましょう。Ⅰペテロ 5：8 にも「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています」と言われています。「私はイエス様を信じたので、もうこれで終わりなので、もうどうなっても構わないよ」というのは、良い信仰のように思われていても、この世にいる間に信者らしい人生を謳歌するということにはマイナスになります。なので正確に理解していきましょう。ダビデは立派な信仰者だったにもかかわらず油断してしまいました。それでその隙を狙われて悪魔、サタンにやられてしまって、二つの大きな過ち、大きな罪を犯すことになります。

その一つ目が今日読んでいただきました聖書に出てくる人の奥さんを奪い取ってしまったということと、それをもみ消すためにその旦那さんを戦場に送り出して殺してしまうというようなとても話にならない悪を行うことになります。それから、もう一つは、Ⅱサムエル 24：10 あたりを見ますと、人口調査を命じます。兵隊がどれぐらいいるのかと。そこで部下が「神様がいつでも増やすこともできるし、減らすこともできるし、神様次第で神様が守ってくださるので、こんなことをやる必要はないですよ」と進言したにもかかわらず、強硬に人口調査を推し進めて、後に悔い改めることになりますけれども、その人口調査に対して神様は非常に怒られます。この大きな二つの神様から罪、悪と言われていることにとらわれるようになったダビデ。なぜそうなってしまったのか。その根源の方に何があったのか、何が理由なのかということを考えないといけません。結局、その二つとも事件の内容は違いますが、根底の方には同じ問題がありました。先週もお話したように、ダビデは自分がイスラエルの本物の王だとは

一度も思ったことはありません。神様がまことの王様で、私はその使いだという姿勢に徹していた者が一瞬油断することによって自分が王様だと思ったのです。だから、神様が私の王様、イスラエルの王様だということを忘れてしまいます。自分が王様なので王様の権力によって自分の欲望を満たすところに走りました。それがこのような悪を行うことになったということです。　それから、人口調査というのも、自分が王様だと思ってしまったので不安になり、兵隊の数がどれぐらいなのかと心配になってしょうがなかったわけです。それはただの心配が問題だという単純な話ではなくて、神様を忘れて、神様が王様だということを忘れていたということでしょう。これが信者が悪に走り、また、罪を犯してしまい、悪魔、サタンに隙を狙われてやられてしまう本当の理由になります。今の言葉で申し上げると、ダビデはキリストを逃してしまったのです。キリストから離れるようになってしまいました。そして、これこそが悪魔、サタンの永遠に変わらない策略というものなのです。創世記3：1-4、アダムとエバの方にやってきて、この戦略で惑わしました。「神様なんかいらないよ。おまえが神になれるのだから」。神のかたちに造られた人間から神を引き離してしまう、これが悪魔の策略なのです。神様なしで自分一人になる、それが世の中では格好良いというイメージを持つようになります。神様を引き離して、自分で人間だけになる、人間で独立するということ、これが格好良いものになっています。それをヒューマニズムと言います。このような策略、このような戦略をもってサタンはこの世を掌握しているのです。これがサタンの策略というものなのです。そして、これを信者にまでこの策略をもって隙を狙って油断したときにすぐさま入ってきてキリストと切り離すわけです。キリストから離れるように。言葉で口先ではキリストと言っていても本当に心から信仰からキリストが消えてなくなるように。これが悪魔の策略なのです。もし信者なのに、福音の人なのに、実際キリストと切り離されるようになった場合には、もうその時からは悪魔の思うつぼです。どんな状況でもそのすべてを利用して罪、悪の方に引きずり込んでいきます。その人が健康な場合は健康を利用して、病気の場合は病気を利用して、成功した場合は成功を利用して、失敗した場合は失敗を利用して、うまくいくときにはうまくいくことを利用して、ダメになったときにはそのダメだということを利用して、何もかも全部を利用して罪、悪の方に引っ張って行くものだということを忘れないようにしましょう。そうすることによって、信者が信者でなくなるということはサタンには不可能なので、信者らしく生きる事を邪魔するのです。一回限りの人生、未信者と同じ水準で、また、信者なのに信者の輝きなどまったく見ることができないまま、生きる理由も世の中の人と同じ、目標も同じ、幸せも同じ、喜びも同じ、悲しみも同じ、全部が同じです。同じだったらまだましなのですが、信者の場合はそれより劣ってしまうのです。これが悪魔、サタンの策略です。信者でも油断すると悪魔にやられてしまうのだということを肝に銘じましょう。だから、その悪魔の策略が何かということを永遠に忘れないようにしましょう。神様と切り離して、キリストと切り離して自分一人にさせるということなのです。日曜日の講壇のメッセージを聞きます。そして、聖書のみことばを私たちは覚えています。しかし、何かがある時に、みことばとは全く関係なく、自分の思い、自分の考え、自分の感情、自分の欲望のままに、自分しかそこにいないように、というのが悪魔の策略なのです。皆さんが講壇のメッセージ、神のメッセージにあまり興味ない、そんなに気にしない。日曜日に聞くだけで、聞かないよりはいいかもしれませんけれども、それは自分がキリストと切り離されて、自分一人で生きて行くよという宣言のようなものなので、悪魔にとっては好都合なのです。まだ習慣になっていないので、歯を食いしばってでもいつでも神の考え、いつでも神のみことばを伺う習慣を身につけていかないといけないでしょうけれども、それが悪魔の策略だということをよく覚えて、聖なる緊張感を持たないといけません。ダビデも倒れます。皆さんを脅すための話ではなくて事実なので。私はここまで一生懸命やっているから大丈夫だろうという思い、油断は禁物です。聖なる緊張感はずっと保っていかないといけません。悪魔というものは、キリストと切り離して自分だけにしてしまう、それが自由だと思わせ、それが都合が良いと思わすのです。でも、そうなると何もかもが、こっちに行っても、あっちに行っても、すべてが罪の方にくっつくようになってしまうのだということを覚えていてください。
だからこそ私たちはガラテヤ2：20をしっかり握って、自分一人ではない、私はキリストとともに十字架で死んだ、いまはキリストが私の内側に生きていらっしゃるのだ。良い時でも悪い時でも、自分が弱い時でも強い時でも関係ありません。これこそが罪に勝てる勝利の鍵なのです。いつでも、どんな状況でも、自分一人で考えずに、自分をキリストに縛り付けること、これこそが罪に勝てる唯一の勝利の武器なのです。そこを非常に、非常にこだわってください。深くいろいろなことを考える前に、キリストに皆さんを縛りつけないといけません。そこから生まれる考えでなければどんなに哲学的に、どんなに良心的に、どんなに道徳に基づいて考えたとしても、悪魔の好都合で罪の方に引きずられるようになるしかないということを忘れないでください。福音の人でも油断すると、つまり、キリストから切り離さ

れると、悪魔、サタンにやられるものなのだと。
しかし、ここで終わってはいけません。その後、ダビデはサウル王のように滅びてこの罪によってダメに終わったという記録はありません。こんな罪を犯して、それ相当の様々な苦難に遭うようになりました。にもかかわらず、ダビデは滅びることはありませんでした。つまり、

2.福音の人ならば、どのような過ち、どのような罪を犯したとしても、それが神の契約を超えることはできません。

これをまたよく覚えていないと罪には勝てません。もちろん、ダビデが犯してしまったことは道徳的に、また、法的に見たときに到底許されるものではありません。信仰的にも許されるものではありません。しかしながら、ダビデはイエス様の系図、イエス様の家系を引き継いで、ずっとその主人公として立たされるようになりました。ダビデはサウル王とは違う契約を握っていたわけです。契約を握っていたという表現よりもっと正確な表現は、契約がダビデを握りしめていたわけです。そういう人間でも罪を犯すのか。犯すことはあります。悪魔は頭を踏み砕かれてその権威がグタグタになっているだけであって、死んで存在が消えたわけではありません。先ほども確認したように、いまもほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜して回っているものなのです。主の再臨のときまではその悪魔の働きが許されているということを看過してはいけません。だから油断しないように、聖なる緊張感、24時間キリストに自分を縛り付ける覚悟をしないといけません。しかし、弱さのゆえに油断することによって罪を犯して、過ちを犯して、失敗するときもあります。それが契約を超えることはできないのです。だからそれによって福音の人は滅びることなどはありません。むしろそれを通して、ダビデのように詩編 51 篇を見ますと、ダビデは徹底的に悔い改めます。その罪を犯す以前はこういうことは一度もありませんでした。でも、自分の犯した罪、悪を行なったそのことに対して、それと向き合って、徹底的に悔い改めて、私は母の胎から罪を持っていた者なのだとまで自分のことを告白しているのです。つまり、福音の人の失敗、その犯してしまった罪、それはその人を滅ぼすものではなくて、本当に口先だけではなくてキリストでなければ絶対ダメな本当の罪人なのだということを骨身にまでしみじみ認めるようになるわけです。これが福音の人と滅びる人との違いです。今の言葉で言いますと、ダビデはこの過ちを通して、徹底的に悔い改めて、自分を根本から見つめ直しました。本当に理論と口先の話ではありません。only キリスト、only 神の国、only 聖霊、only 伝道しかない、これが骨にしみじみ刻み込まれることになるわけです。これが福音の人なのです。パウロも同じでした。ローマ 7：24-25 を見ますと、パウロにどのような問題があったのかわかりませんが、「この死の、からだ」と表現するほどの悩み、あるいは罪なのか、弱さなのか、何かを抱えて悩んでいました。けれどもすぐに切り替えて、25 節、キリスト・イエスにある者が罪に定められることはありません。なぜなのでしょうか。それが 8 章です。キリスト・イエスの内にある者は、いのちの御霊の原理によって、死と罪の原理から解放されているからなのです。これが福音の人というものです。なので福音の人ならば、どのような過ち、罪を犯したとしても、その過ちと罪によってそれが重荷になってそれを背負っていてはいけません。それが自分の良心、道徳などを取り上げて、それを背負って、それが正義、正しいかのように思って制せられ、それにとらわれてアップアップして身動きが取れないような状態は望ましくありません。それはふさわしくないものです。自分が犯してしまって、そして、道徳、法的な基準から見たときには到底許されないものであっても、そして、世の中の視線、周りからどう見られるにしても契約を超えることはできません。つまり、キリストを超えることはできません。だから、その犯した罪と失敗をもって自分をキリストに縛りつけないといけません。それが犯してしまった罪に対して勝てる方法なのです。偉そうに良心どうのこうの、道徳がどうのこうの。そうすると悪魔の好都合になります。私たちは罪に負けないためにキリストに自分を縛り付けて、そして、負けたときにもまたキリストに縛りつけないといけません。自分が前面に立つということは決していりません。only キリストなのです。キリストにとらわれない限りは罪に倒れるようになります。倒れても立ち上がることができなくなります。

　ということで、これから信者らしい格好良い勝利の人生を歩むために罪を軽く思う、そういう思いは全部捨てましょう。罪を徹底的に警戒する聖なる緊張感を保ち続けるようにしましょう。聖なる緊張感を保つということは、先ほども申し上げましたように、キリストにいつでも自分を縛り付けることなのです。キリストを主人として迎えて、キリストがともにおられるインマヌエルの祝福を味わうことを休まない。そして、キリストを伝える使命の自負を忘れることがない。これがキリストに私を縛り付ける

ことです。にもかかわらず、油断することによって罪を犯して、罪によって倒れたときに、良心や道徳などに引っかからないで、それにアップアップして重荷を背負って身動きが取れない、それが良心的な人間だというような勘違いなどにとらわれていないで、罪によって倒れたときにも自分をキリストに縛りつけましょう。その罪のために十字架で完了したと血を流されたキリストに自分を縛り付けることなのです。なぜなのでしょうか。そこでアップアップする暇などありません。徹底的に悔い改めましょう。悔い改めるというのは、キリストに自分を縛り付けることなのです。自分を捨ててキリストに自分を縛り付けることです。今まで自分も知らないうちに、イエスはキリストと言いながらも正義、道徳、法律、良心…とこだわっていた全部を切り離して、only キリスト、キリストに自分を縛り付けること、それを悔い改めると言います。なぜそうしないといけないのでしょうか。私たちがこの世に生きる理由は、成功するためでも、幸せになるためでも、家族のためでもありません。唯一、福音宣教、伝道者の道を歩んでいかないといけないけれども、それに邪魔になるようなことは許してはいけません。もっと教会的に申し上げると、サタンの攻撃に隙を狙われないようにいつでもどんなときでも「聖餐の告白」と仲良くしてください。それがキリストに縛り付けることなのです。キリストがどういう方で、私はどういう存在で、何のために生きているのか、自分の自負は何なのか、それが「聖餐の告白」です。そして、失敗して倒れたその時も「聖餐の告白」とより仲良くしてください。それがキリストに縛り付けることなのです。そういう意味でイエス様は「主の祈り」の中でこのような祈りを教えられました。神の国が臨まれるように、福音宣教のために祈ること、私たちにとってそれ以外の祈りはないのだ。そして、その福音宣教に邪魔にならないように、試みにあわせないように。罪を犯さないように。悪魔に隙など狙われないように祈りなさい。そうなると福音宣教に邪魔になるから。道徳的な理由ではありません。そして、万が一、試みにあって悪に倒れた場合は、悪からお救いくださいと。そこに留まっていてはいけません。すぐにキリストによってそこから抜け出さないといけません。なぜ抜け出さないのでしょうか。偉そうな良心、偉そうな道徳、偉そうな法律、偉そうな正義感、それが悪魔に通用すると思いますか。イエスがキリストと告白すること、キリスト教というのは目に見えない霊的事実、霊的世界を目に見えるものよりはっきりと信じることがキリスト教会です。なのでなにも文句言わずに、キリストに縛り付けるように、悪より救い出してください。「神様、私はこんな罪を。私は本当に人間ではありません」。そこまではいいです。それでずっと沈んでいるままで、とても良心の柔らかい人間のように思われるかもしれません。それは今現在、悪魔にやられてている最中なんです。キリストから切り離して自分一人、ひとりぼっちになっている状態なのです。一番悪いのはひとりぼっちです。ガラテヤ 2：20 に自分を縛り付けて、いつでもどんな時でも、私は私ではないのだと。試みにあわせないように。悪より救い出してください。私たちが今まで教わってきたいろいろな法則などから見たときに、今の話が矛盾のように聞こえるかもしれません。だから、とても難しいし、教会の中でもあらゆる意見があります。こうすべきだ。ああすべきだと。でも、罪を軽く思うことは聖書とは違う話です。私たちは罪から切り離されているものなので罪を犯してはいけません。キリストに縛り付けることです。しかし、油断して倒れる場合があります。そこに溺れていてはいけません。それが救いより大きいものにはなりません。イエス・キリストの十字架より大きいものはありません。たとえダビデのように法的に、道徳的に到底許されないことであっても、それに縛られていてはいけません。キリストに縛り付けることです。道徳と良心ではなくて。

（祈り）
恵み深い父なる神様。イエス・キリストの血潮によって罪から、地獄の運命から私たちは救われました。そして、この世にいる間、福音宣教という誰も真似できない最高に尊い使命のために召されていることを覚えさせてください。そのことを基準にして、キリストに自分を縛り付ける理由を正しく理解して、悪魔に隙を与えずに、そして、倒れたときでも悪魔に隙を与えることがないように、福音宣教の聖なる道を突き進むことができる信者らしい人生を送ることができるように、ひとりひとりをかえりみてください。キリストの御名をほめたたえます。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン